

（嘉楽校六年生 清原保雄）

「ああ何という便利な文字だろう。これこそ文明国のほこりであろうと思う。人智の進歩は際限なしとはこの事だろう。字を書くにもすこしの時間を費やしてはいかぬ。「それで諸君、私は言葉の通ずるまで此の速記を世の中に広めたいと思います」との一言僕の身にしみた。そうだ、僕も生命がある限りは先生のごころざしをついで、この便利な速記文字を社会のために広めよう。」

（安井校六年生 長谷川政子）

「国を盛大にする速記文字・・・速記文字とはどんな文字か知らんと学校へくる時も胸に浮かんで気がせき立ててひとりでに小走りになって来る・・・皆は紙を出して速記文字をうつそうとしておられるのに、私は紙も鉛筆も持ってこなかったので、お友達にもらおうと、たづねましたが、誰もくれません。心配で心配でならないので速記術のお話も熱心に聞かないで、ただどうしたらよいかと思っていました。その時先生は「うつさないで書いた物をあげましょう」といわれました。私は飛び立つ程うれしうございました。それから、私は心配もどこかへにげて行って、にこにこ顔でお話を聞いていましたので、お話のおしまい頃には自分の名も書け、お父さんの名もお母さんの名も自分の住んでいる所も書けるようになりましたので、うれしくてうれしくてたまりません。これから先もこの便利な速記文字を日本中の国民が使っ